INFORMATION

寺子屋トーク

橋口譲二さんの寺子屋トーク、5月28日・29日に決定!!

第16回寺子屋トークは、2夜にわたって写真家の橋口譲二さんのスライド&トークの集いを行います。1夜は「視線」「疾走」「自由」など80年代の作品を、また2夜は「17歳」「職1991～1995WORK」「夢――懸命に生きた人々」など90年代の作品を中心に、スライドと橋口さんのトークで構成します。橋口さんがこの20年間、写真を撮りながら考えてきた、日本と日本人について語っていただきます。ふるってご参加ください。

○日　時　5月28日(金)・29日(土)
両日とも19:00～21:00
○参加費　1,000円(会員500円)
※5／28終了後、交流会あり。

第17回は6月11日に伊藤隆二さんを迎えて

長年日本の幼児教育の世界で、こころの教育、福祉や宗教的視点から人間の育ちについて、深い考察を重ねてこられた東洋大学教授伊藤隆二さんが、6月の寺子屋トークに出講されます。母親はもちろん、教育関係者にもぜひお勧めします。

○日　時　6月11日(金)
10:00～12:00
○参加費　1,000円(会員500円)

【新入会員ご紹介】

(1999年3月30日まで)

2月1日以降にご入会いただいた方々です。ありがとうございました。

○一般会員
【大阪府】
井上　弘一　大阪市城東区
【奈良県】
松村　真吾　奈良市
【愛知県】
緋月　真歩　春日井市
会員総数現在233名

協力事業

あふれる愛～マザー・テレサ写真展



貧しい人々や恵まれない孤児、病人の救済活動をはじめ、恵まれない人々に生涯の大半を捧げた20世紀最後の聖女マザー・テレサ。長年マザー・テレサを追い続けた写真家沖守弘氏の写真パネル数十点を展示し、写真を通してマザー・テレサの生き方と愛をご紹介します。

沖守弘さんは、74年以来、レンズを通してマザーテレサ「愛の奇跡」を追い続けて来られました。マザー・テレサ、そして彼女と共に救済活動にあたる修道女たちの姿を記録、数々の写真集を発表、愛にあふれたマザーの生き方を伝えてきました。

29日には、沖守弘さんの記念講演会「20世紀の聖女に学んだ22年」を開催、マザー・テレサのすべてを語っていただきます。同日には、沖さんのサイン会と書籍販売、チャイとベンガルカレーの販売なども行われ、収益はマザーの遺志を引き継ぎ、活動を続ける修道女のもとへ寄附されます。

○マザーテレサ写真展(入場無料)
4月24日(土)～30日(金)
毎日10:00～18:00
○沖守弘さん講演会(入場無料)
4月29日(祝)　13:30～16:30

協力事業

「気」のつどい現代作家展

会員の坂田明道さん(関西芸術短期大学教授)をはじめ、芸術家の方々の集まり「気のつどい」。書画、水墨画、洋画、陶芸……、さまざまなジャンルの作品を一同に展示し、應典院がアート空間に変身。

5月20日には、出展する作家が一同に会し、應典院住職によるアート供養祭があります。終了後には、作家の方々との交流会も予定しています。

アート作品で埋め尽くされた應典院に、ぜひご来場ください。寺町倶楽部協力事業。

○「気」のつどい現代作家展(入場無料)
5月21日(金)～30日(日)
10:00～17:00
○アート供養祭(入場無料)
5月20日(木)　19:00～(予定)

その他

写真屋なぎちゃんの写真考座

次回のテーマは「レンズは何が違うのか?」です。少人数ながら、和気藹々と続いています。費用は、実費のみですので、どなたでも気軽にご参加いただけます。

次回は……

○日時　4月6日(火)　19:00～

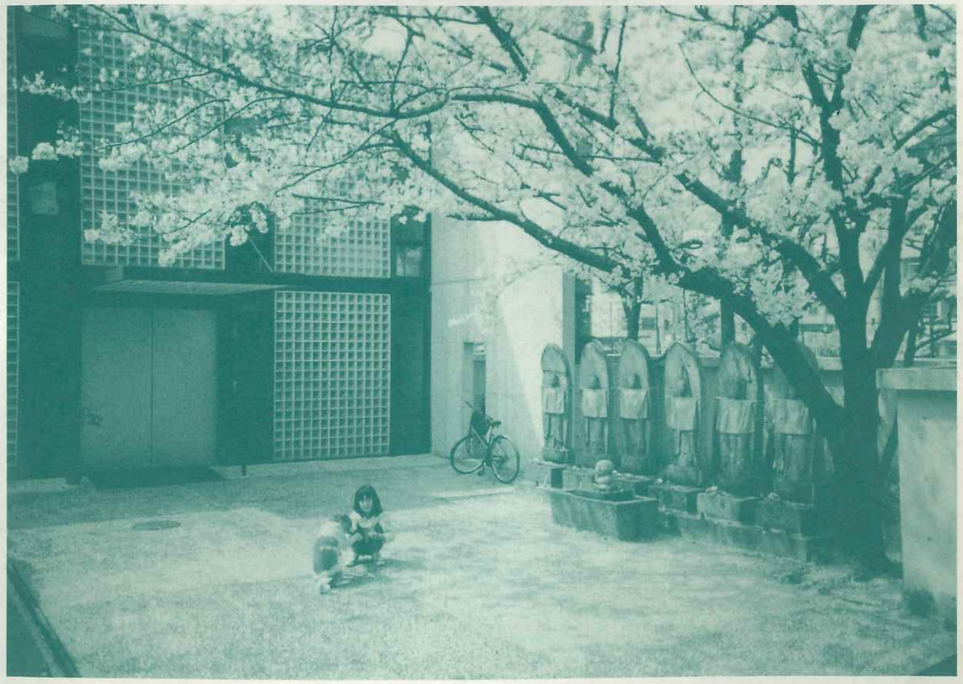
サリュ VOL.13
應典院寺町倶楽部のニューズレター
発行日　1999年4月8日
(偶数月発行)
編集人　池野　亮
発行所　應典院寺町倶楽部
〒543－0076
大阪市天王寺区下寺町1-1-27
TEL06－6771－7641
FAX06－6770－3147

應典院寺町倶楽部のニューズレター

Salut

[サリュ]
フランス語で救いの意

1999 APRIL
vol. 13



先日、竹内敏晴さんの「こころとからだのレッスン」がありました。レッスンのはじめに、「日頃、からだを意識して動かすことはあまりないと思います。今日は、意識しながら動いたり、感じたりしてみましょう」と言われました。改めて自分のからだを意識してみると、意外とあちこちに力がはいり、こわばっていることに気づきます。

からだが固くなっていると、無意識のうちに人に対して、またあらゆる物事に対して、身構えてしまうといいます。からだ、そしてこころに力がはいっていることがありませんか。からだもこころもやわらかくすることから、新しいコミュニケーションも始まるのではないでしょうか。

EVENT REPORT SPECIAL

竹内敏晴さんの寺子屋トークに過去最高の一七四名が来場!!

ことばを通して〈からだ〉と〈こころ〉を見つめ直す

今年度最後の寺子屋トークは、去る2月11日、これまで最高の174名の参加者を迎え、盛大に開催されました。

今回の講師は、演出家で障害者の療育にも関わる竹内敏晴さん。当日は生憎の雪空でしたが、教育や福祉関係の参加者を中心に、遠方は四国・九州からも続々来場が相次ぎ、應典院の本堂ホールは、立錐の余地なき状態に。竹内さんの一言一句を聞き漏らすまいとする、真摯な会場の雰囲気は、心地よい緊張感みなぎるものがありました。

◆　◆　◆

竹内さんは、幼い頃から難聴で、「言葉を話す」ということに、たいへん苦労されました。そのご自身の体験にもとづいて、「言葉とは?」、「コミュニケーションとは?」などについて、お話を進められました。

「言葉を話す」ということの意味を問い直すことによって、心の中の大切な何かが見えそうな気がします。

「言葉が届く」とは?

竹内さんは、40代なかばになってから、声がはっきりと出るようになり、自分の言葉が相手に「じかに届いている」と初めて感じられたといいます。



しかし、自分以外の人はよく話せると思っていたのにどうも違うらしい、ということに気づかれます。

例えば、AさんとBさんが話をしている。でも、よく聞いているとAさんはAさんで勝手に話し、BさんはBさんで勝手に話している。お互いのつながりがまったくない状態で話をしている……。

改めて考えてみると、確かに会話をしているようで個々が勝手に話している、という状況はよくあるのではないでしょうか。ただ、「言葉を話す」ことが「普通」であると思っている多くの人は、そんな状況を感じることが少なくなっていて、それが現代の人と人とのつながりの希薄さにつながっているのではないでしょうか。

「情報伝達の言葉」と「表現の言葉」

フランスの哲学者メルロ・ポンティという人が、言葉には、「情報伝達の言葉」と「表現の言葉」の2種類があるといっています。

「情報伝達の言葉」とは、ひとつひとつの言葉の意味が社会的に確定しているもの、誰がどう組み合わせても通じるものです。一方の「表現の言葉」とは、自分が感じていることを何とか言葉にしようとすること。例えば生後3、4か月の赤ん坊が「あー、あー」と話しかけてくるような、文章としてはきちんと成り立っていないけれど全身で話しかけてくる意味がわかるという言葉です。

竹内さんは、人間にとっての根源的な言葉とは「表現の言葉」の方で、それが十分にできるかどうかが「人間が人間である」ことにつながるだろうと、いいます。

つまり、言葉というものは情報を伝達するためだけにあるのではなく、人と人とがつながることそのものとしてあるということ。

ところが現代社会では、「情報伝達の言葉」を早く身につけることを子どもたちにも要求します。子ども自身は自分の体で感じたことを言葉にしたいと思っているのに、周囲からそうでないことを要求される。「早く、早く」とせきたてられ、自分が何を感じているのか、どう表現しようかと考えている時間もない。

子どもが、自分の感じたことを言葉として表現できない、人とのつながりが実感できないということに、最近の子どもたちの事件の原因を探る鍵があるように思いました。

「伝える」から「伝わる」へ

竹内さんのお話は、人と人とがどうやって結びついていけばいいのかを一人ひとりが考え直すヒントを与えてくださいました。

「自分の言葉で自分を表現することができて、初めて社会的な言葉を使いこなしていくことができる。つまり、自分が生み出した言葉をつなぎ、社会で使いこなしていこうとすることができて、他者との言葉のやりとりが十分にできる。自分が生きるのは、自分の言葉によって生きるのです……」。

私たちは、「こうあるべきだ」という考え方をいったん手放し、自分の言葉をどう見つけ、他の人とどうつながっていけるのかということを問い直すことが大切に感じました。

以下は、当日ご参加された、川井田祥子さんの感想です。

竹内　敏晴
(たけうち としはる)
'25年、東京生まれ。東京大学文学部卒業、演出家。劇団ぶどうの会、代々木小劇場を経て、'72年、竹内演劇研究所を開設主宰し、演劇創造とともに障害者療育にも関わる。元宮城教育大学教授、現在、南山短期大学人間関係科教授。著書に、「ことばが劈かれるとき」「教師のためのからだとことば考」(いずれもちくま文庫)、「日本語のレッスン」(講談社現代新書)他がある。

「私を丸ごと受けとめてくれる他者」として…

川井田祥子

竹内さんのお話を聴いた後、私なりにコミュニケーションについて考えてみました。

最近、マスコミなどで取り上げられる教育改革にまつわる話には、「コミュニケーション能力」をめぐっての議論が活発に行われているようです。

例えば、2002年から実施される新学習指導要領では、教師が独自に授業内容を決められる「総合的な学習の時間」が導入されます。そして、「21世紀に向けて国際社会の中で通用するコミュニケーション能力を身につけること」を目的に、ディベートを授業の中に取り入れる試みが広がっているそうです。ディベートとは、あるテーマについて肯定側と否定側2つのグループに分かれ、一定の時間内で議論し合い、最後に勝敗の判定を下すというものです。

けれど私は、コミュニケーションについてまで「評価」が持ち込まれることに疑問を感じるのです。自分を表現しようとすること、それを相手がどう受けとめるかは二人の間の問題であり、評価できるものではないと思うからです。また、自分の考えを主張し、勝ち負けを争うことがコミュニケーションではなく、語し合いを重ねてお互いの接点を見つけ、まったく別の意見を双方の歩みよりによって生み出そうとすることも必要なことではないでしょうか。

一方、学級崩壊という問題が起こり、「ムカツク」「キレル」といった言葉でしか自分の状態を表現しようとしない子どもたちについて、いろいろな議論が交わされています。子どもたちを問題視する前に、言葉にならないものや、「表現の言葉」を受けとめようとする存在として、大人がどのように関われるかが、今いちばん必要なことのように思います。

「自分のことを丸ごと受けとめてくれる他者がいる」と感じられる、つたない言葉でもいいから自分を表現しようと思える、そんな存在でありたい。と同時に、言葉が自分のものになっているか、相手に届いているかを見つめ直す勇気や大切さを改めて感じる時間でした。

川井田祥子(かわいだ・しょうこ)さん
医療関係のNPOで専従スタッフをしていた3年前、「毎日書く」という考現学と出会い『見えない学校』ネットワークに参加。そこでは「違いに出会う」をコンセプトに、教育をさまざまな視点から捉えようとする試みが行われていた。そして、考現学を書きながら、「患者の自己決定」について考えるうちに、「医療と教育は切り離せない」と感じ、自分からもっとも遠いと思っていた"教育"の仕事に関わることになる。現在、らくだ教材を使った塾「すくーる・ほろん」を大阪市内で開いている。

寺子屋トークも、今回が15回目。第1回の金香百合さん以来、さまざまな「こころ」について聴講を重ねてきました。98年度は、下記の通り7回を開催、累積528名の参加者を得ました。

最近は広報面でも浸透しており、近く朝日新聞の夕刊でも、寺子屋トークの試みについて、大きく紹介される予定です。

◆　◆

寺子屋トーク98年度の開催記録

'98年
6月　生野学園校長　村山實さん
7月　大脳生理学者　久保田競さん
9月　精神科医・作家　野田正彰さん
10月　メディア作家　田上時子さん
11月　東京大学助教授　汐見稔幸さん他
12月　ホリスティック教育研究会　手塚郁恵さん

'99年
2月　演出家　竹内敏晴さん

◆　◆

次の99年度、すでに写真家の橋口譲二さんやジャーナリストの横川和夫さん、東洋大学教授の伊藤隆二さんらの出講が決まっており、教育、芸術、国際協力、癒しなど多様なアプローチで、さらなる「こころの文化」発信を目指していく所存です。

今後の寺子屋トークにも、ご期待ください。

'98年度理事会報告

心やさしいボランティア社会を目指して

寺町倶楽部、3年目の新たなスタートに向けて！
池野亮事務局長に聞く



2月27日開催された理事会の模様▶

應典院とともに'97年5月にスタートした應典院寺町倶楽部。昨年は定例の寺子屋トークを始め、大道芸人・ギリヤーク尼ヶ崎さんの青空公演と映画上映会、またNPOフェスティバルのコモンズフェスタ'98などを開催、いっそう充実した活動年度となりました。

新たな3年目を目前にして、去る2月27日、倶楽部の理事会を開催、次年度に向けて熱心に意見の交換がありました（参加理事7名）。

理事会の報告を兼ねて、事務局長の池野亮さんに、3年目の寺町倶楽部について聞きました。



▲コモンズフェスタ「教育って何だ！」の交流会。東大の汐見稔幸さんを中心に、地域の教育に関わる人々が集った。'98年11月。

■継続は力なり

――昨年もいろいろ話題に富んだ應典院寺町倶楽部でしたが、一年をふりかえり、どんな感想をお持ちですか。

池野　倶楽部の使命とは何だろう、と問いかけながら試行錯誤の2年でしたが、いろんな人の出会いを通じて、だんだんこちらに対するニーズが見えてきた感じがします。

とくに、夏のギリヤークさん、秋のコモンズフェスタを中心に、倶楽部独自の企画もできたし、その存在を広く認知していただけたのではないでしょうか。寺子屋トークも15回を数えますが、継続は力なりで、だんだん定着してきた感があります。

――新しく打ち出された交流事業も活発でしたね。

池野　4月の夜桜会まで、この1年に4回交流会を開催したことになりますが、ビールが入る企画となると、グンと参加が増えます（笑）。1月の新年会には70名近い参加があり、受付から裏方まで全部会員の有志が担当してくれました。せっかくいろんな人が集まるのですから、これからは相互にもっと関わることのできるよう、人的交流に工夫をしていきたいですね。

――見えない努力ですが、地道な広報活動も実を結びつつあります。

池野　サリュの発行はもちろんですが、その都度都心の文化施設に配付しているチラシの効果も大きい。大阪市の教育委員会にも、たびたび後援していただいています。

最近はインターネットでの問い合わせもあります。

■市民活動サポート事業に期待

――理事会では、来年度事業について、どのあたりを中心に話し合われたのでしょうか。

池野　まず主催事業ではコア事業を中心に、これまでの寺子屋トーク、サリュなどの広報、交流の各事業について決議がありました。コア事業としては、昨年に続いて、11月2日から14日まで「コモンズ・フェスタ'99日本人の死に方」、それと年明けに「シアトリカル應典院舞台芸術祭2000」を計画しています。いずれも2回目の開催になりますが、前回以上にパワーアップしてにぎやかな内容にしたいですね。

それと新年度からの目玉は、新しく始まる市民活動サポート事業です。これは、地域に根ざした活動を行うボランティア団体を、倶楽部がいろいろな側面から支援するという企画です。

――具体的にいうと、どういう支援になるのですか。

池野　初年度はとりあえず1年を年限にして、支援活動を行いますが、主に場所と機能、そして資金の3つの支援となります。

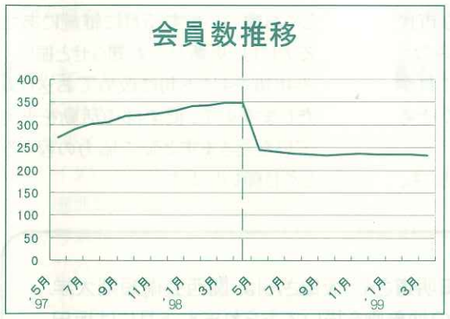
場所の支援は、事務所のデスク貸与のほか、団体の打合せやイベントに利用する場合も会場の優待制度があります。機能の支援は、電話、FAX、コピー、印刷機などのワークステーションの利用、また、一部事務の代行なども考えています。

資金の支援は大きな金額はできませんが、活動費の一部を提供します。

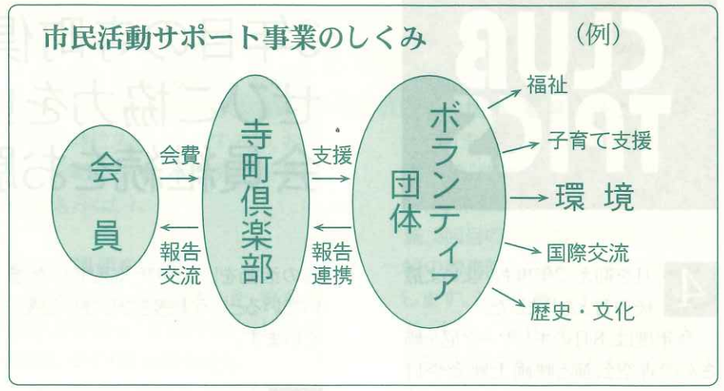
これからの社会をリードしていくのは、組織は小さくともしっかり地域に密着したボランティア団体だと思います。これを底辺から支えることは、今後のボランティア社会を一緒に築いていくことでもあります。むろん、應典院さんの全面的な協力があってこそ、実現できることはいうまでもありませんが。

――ボランティア団体には、願ってもない条件ですね。

池野　ボランティア団体というのは発会して間もない時がいちばんしんどい。組織的に完成された団体より、未知数だけど、何かやりそう、という若い団体に期待したいですね。



同時に、各団体の活動を通じて倶楽部のテーマである<参加・体験・交流>をもっと深めたい。倶楽部の存在理由というか、わかりやすいかたちで、会員さんにも活動のねらいを伝えていきたいという願いもあります。団体の意のままではなく、倶楽部と団体がパートナーシップをとりながら、それぞれのテーマに適った相互支援の関係を築いていきたいですね。



――ボランティア団体の活動がひいては、倶楽部の会員の活動にもつながってくるわけですね。

池野　例えば地元の環境を守るボランティア団体を、倶楽部が支援するとします（上図）。

毎号のサリュで定期的な活動報告があるほか、半年に1回、オープンな報告会を行う。イベントや交流会でもいい。いろんな場面にふれながら、倶楽部の会員さんが同じ視野で環境問題に関わっていただく機会が生まれていく。倶楽部の会員は、環境ボランティアの支援者であると同時に、学習者にもなるわけです。

■会員による支援の輪を

――さて、倶楽部の大きな収入源となる会員ですが、現在いかがでしょうか。

池野　左表の通り、ピーク時の349名から比べ、33%減の235名が現状です（3月20日現在）。これを収入に単純に勘案すると、114万円以上の減収となっています。まあ、スタート当初があまりに順調すぎたと、個人的には思っていますが、ようやく3年目にして倶楽部の存在意義もはっきりしてきたので、これからは改めて新しい会員を増やしていくつもりです。

同時に、限られた予算の中から、なぜその事業にお金をかけるのか、その目的や成果をきちんと公開していくことは、私たちの活動の上で、すごく大切なことになってきますね。

――最後に新しい99年度の倶楽部の方針について、お話しください。

池野　活動方針は、昨年同様<参加・交流・体験>としますが、サブテーマとして<新たな市民文化の発信へ向けて>を掲げました。

市民文化というのは、公でもない私でもない、共文化ということであり、共働社会、共生社会の原点となるものです。特定の分野にまとまらない、何でも受け入れ可能な文化ともいえる。こういった理念を、具体化していくためには、相当の知恵と実力が必要ですが、倶楽部のいちばんの弱点は慢性的な人材不足です。事務局のボランティアスタッフが参加して、5月からはこれまでにない、事務局ワークを心がけていきたいと願っています。

――期待しています。

99年度総会は6月1日に開催。会員みんなで盛り上げよう！

應典院寺町倶楽部発会3年目を迎え、99年度総会が来る6月1日（火）の19時から應典院にて開催されます。

総会はだいたい難しくて重々しいと相場が決まっているようですが、3年目の出発に臨み、今回は参加して楽しい、納得できる総会を目指しています。できるだけ会員の意見を交換できる場にしたいので、一部ワークショップやトークも計画しています。

また、総会に先立って、市民活動サポート団体の代表者から、会の現状報告とごあいさつもいただく予定です。

正式なご案内は、4月下旬に郵送されますが、いまからぜひスケジュール帳にマークしておいて！

CLUB TPICS

3年目の寺町倶楽部にもぜひご協力を!!会員継続をお願いします!!

4月を迎え、2年度もいよいよ最後の月となりました。

今年度は、8月のギリヤーク尼ヶ崎さんの青空公演と映画上映会や11月のコモンズフェスタ'98～それぞれの歩き方～、そして寺子屋トークと、主催事業を重ねるごとに、倶楽部に対する社会的な注目度も高くなってきているように感じます。また、注目度が高まるほど、寺町倶楽部が行っている活動の意義を再認識します。

会員相互の交流を目的とした交流事業は、大きなものでは4回開催し、会員の有志の方が中心となって運営、実施を行い、多くの新しい出会いがありました。

2年度、さまざまな事業を通して、ひとりひとりの会員のみなさんに、倶楽部の活動をしっかりと支えていただいているという実感をひしひしと感じています。

理事会を終えて、3年目へ向けて寺町倶楽部の新しい動きが始まろうとしています。

3年目には、新事業の市民活動サポート事業を始め、コモンズ・フェスタ'99、舞台芸術祭2000、寺子屋トークの主催事業、そしてその他にもさまざまな事業を展開していく予定です。それらの事業を通して、新たな市民文化の発信へ向けて、会員のみなさんとご一緒に、寺町倶楽部のこれからのかたちを創りあげていきたいと考えています。

3年目の寺町倶楽部の活動にも、ご協力をお願いします。そして、ぜひさまざまな事業にご参加ください。倶楽部の活動が、よりよい社会作りへと、将来的につながっていくためには、会員のみなさんのさまざまにかたちのでの参加が大切になってきます。

倶楽部の収入は、ほぼ100%が会費収入です。5月からいよいよ3年目がスタート、全会員の約7割の方が、会費の更新期にあたります。

次年度も、会員の継続をどうぞよろしくお願いします。5月に継続にあたる方には、更新月のお知らせと振り込み用紙を4月下旬に改めてお送りいたしますので、倶楽部の活動を支えていただきますよう、ご協力の程よろしくお願いします。

VOICE ボイス

今回のボイスは、坂田明道さん。坂田さんは、関西芸術短期大学の教授で、水墨画技法の抽象画を描いておられます。5月には坂田さんを中心にしたアーティストが集合し、「気」のつどい現代作家展(8頁に詳細)が開催されます。



私が應典院のことを初めて知ったのは、知人のアーティストから、「展覧会ができそうなお寺がある」と、紹介してもらったことがきっかけです。

場のもつ雰囲気と作品が創りだす世界を大切にしたいと思い、今までも多くの神社仏閣で、グループ展や個展を開いてきましたから、ぜひ一度行ってみたいと思いました。

現代風の外観には驚きましたが、私のこころを捉えたのは2階の「気づきの広場」からの風景でした。ここにいる私と、ガラスの向こうにひろがる広大な墓地と背景の木々。現世と黄泉の国とが同時にそこにある。その風景を見た時、「気」というテーマが浮かびました。

大学で、学生によく言うのは、自分を抑える、こらえることも時には必要だけれども、抑え込んだ自分の中にこそ、表現したいものがあるはずだ。他人に自分を近づけるのでなく、自分の内なるものに近づくことが大切だということです。

自分の内なるもの、まさにそれは「気」の流れだと直感しました。

今までも、「念のつどい」、「天女のつどい」など、その時に感じたテーマで、グループ展を開催し、自分の感じたことを作品として残してきました。この5月の「気のつどい現代作家展」では、体内の気の流るるままに創りあげた作品を、他の作家たちとともに展示します。

西洋文明を意識しすぎるがあまり、日本の伝統文化のすばらしさが薄れてしまっている現代社会。今度の作品展では、とくに日本独自の文化を意識した作品が多く展示されます。

ご来場いただいたみなさんにも、日本が長年築きあげてきた文化のすばらしさを感じ取っていただければと思っています。

秋田住職発 應典院掲示板

春らんまん。大蓮寺名物の桜の花が咲き誇り、日一日とあたたかさが増していく今日この頃です。

4月は、新しくいろんな人生がスタートする季節。新入生、新社会人、新家族、また新たに今までとは違う、第2の人生を始める人もいます。未知の世界を前に、期待と不安を半ばさせながら、誰もが「この一歩」を踏みしめます。

それぞれの第一歩。たくさんの人の思いを集めながら、その一歩が春の眠りから覚まします。

がんばれ。春の人たち。

◆ ◆

イッセー尾形さん来寺

去る2月9日、ふらりとイッセー尾形さんが来山、じつは春に予定されているドイツ公演のポスターを制作中とかで、應典院の2階、気づきの広場で一時、写真撮影となりました。

くたびれたサラリーマンが、時間つぶしに立ち寄ったような設定で、何だか妙にハマって楽しかったです。ポスターは完成したら、應典院に掲示しますので、お楽しみに。ちなみに、撮影者は橋口譲二さん。



ギリヤーク尼ヶ崎さん、公演

昨年、應典院の夏をヒートさせた、大道芸人・ギリヤーク尼崎さんが、来る5月1日(土)、大蓮寺境内で青空公演と映画「祈りの踊り」の上映会を行います。

森と墓碑に囲まれた大蓮寺がすっかり気に入ってくださって、大阪はほかにアメリカ村での公演があるのみ。この日は本堂前にスクリーンを張って、さながら納涼映画会の雰囲気で。日没同時にスタートしますので、お早めにご来場ください(投げ銭制・事前の申込みなし)。

経典講座を開催

昨年開催して好評だった、経典講座を、6月29日(火)の10時～12時で開催します(参加費未定)。

應典院の活動グループが自主的に主催するもので、講師は佛教大学の藤本浄彦教授。これまで講読してきた浄土三部経のひとつ「観無量寿経」について詳説していただきます。

初めての方には、少し難しいかもしれませんが、予習の意欲ある方には事前に資料は提供します。申込みは、應典院事務局まで。

春の講座でリフレッシュ!

恒例の春の講座が、5月より順次開始となります。

いずれもこれまで好評だった講座を、いっそうグレードアップして企画しました。「ガーデニング」「テーブルコーディネート」「はがき絵」「人間関係」「写仏」の5本。くわしくは講座案内をご参照ください。

春の恒例・霊場参拝ツアー

これまた恒例の大蓮寺・應典院の合同の「法然上人霊跡参拝ツアー」は、今年は5月16日と10月24日に実施、5回目の今回は、25霊場のうち、尼崎の如来院と高砂の十輪寺をお参りします。途中、灘の名酒どころを訪ね、少々の「味見」あり。初めての方でも参加できますので、ふるってお申込みください。

・日　時…5月16日(日)
　9:00～18:00
・参加費…1万円(昼食含)
※詳しくは應典院まで。

トークサロン

寒いうちは少し参加の寂しかったトークサロンですが、春を迎え気分一新、再スタートします。

お馴染みさんはもちろん、飛び入り参加、大歓迎です。

・4月…14日(水)・17日(土)
・5月…19日(水)
・6月…16日(水)・19日(土)

※水は19時～、土は14時～開始。
※4月21日は上記に変更となりましたので、お間違いなく!

母なる大地へ届け!! ネイティブアメリカンのコンサート

ネイティブアメリカンの権利回復のための活動を続けるデニス・バンクスさんの「'99マザーアース・ツアー」が、去る2月4日に開催されました。

「子どもや学生、社会人、高齢者、障害を持った方々、いろんな人たちの前でお話をしてきましたが、一貫して感じるのは、大自然の大きな命の中で自分が生かされている、その大いなる命と自分とのつながりを感じたい、ということです」とのデニスさんのメッセージは、人と人、人と自然とのつながりの大切を改めて実感しました。

宗教学者の鎌田東二さん、映画監督の大重潤一郎さんを交えて、デニスさんとのトークセッションでは、それぞれ立場の違いはあれ、異口同音に人間としての精神的高まりこそが大切とのお話がありました。



最後は、自然舞踏や天空オーケストラによる民族音楽ライブ、鎌田さんの弾き語り、そしてデニスさんのインディアンの唄。魂を揺さぶるような音楽に、参加した人たちも一緒になって、会場全体がひとつのハーモニーを奏でました。(應典院協力事業)